

近江商人の陰徳善事 日野商人の事例

日野町教育委員会 生涯学習課 歴史文化担当課長
近江日野商人ふるさと館 館長 岡井 健司

1) 近江商人

①近江商人とは

- ・江戸時代において、近江国に本宅を置いて他国稼ぎをした商人
- ・輩出地により活動時期、取扱商品、商圈が異なる
- ・八幡商人、日野商人、五個荘商人、湖東商人

②近江商人の商法

- ・のこぎり商い（持下り商品の行商）
- ・出店経営（得意場に出店を展開）
- ・産物廻し（地域間の需給関係・価格差を利用）
- ・乗合商い（共同経営の導入によるリスク分散）
➡近代的な商業経営にいち早く到達した商人として評価

③近江商人の経営理念

- ・「三方よし」～売り手よし、買い手よし、世間よし～
- ・初代伊藤忠兵衛「菩薩の業」
「商売道の尊さは、売り買いを何れをも益し、世の不足をうずめ、御仏の心にかなうもの」
- ・中村治兵衛家「宗次郎幼主書置」
「たとえ他国へ商いに参り候ても、この商い物この国の人一切の人々皆々心よく着申され候様にと、自分のことに思わず、皆人よく様にと思い、高利望み申さず、とかく天道のめぐみ次第と只その行く先の人を大切に思うべく候」

2) 日野商人の経営理念～中井源左衛門家を事例に～

①中井源左衛門家

- ・初代中井源左衛門光武（良祐）：享保元年（1716）生、文化2年（1805）没
- ・19歳の時、二両を元手に行商を始め、一代で十数箇所の出店を設け、10万両に及ぶ資産を築いた。
- ・仙台店を本店とし、全国各地の出店を結んだ産物廻しを展開（古手、木綿、薬種、呉服／生糸、紅花、海産物）

②金持商人一枚起請文

- 文化2年、良祐が90歳の時に記した遺訓

- ・【運】 諸々の人沙汰し申さるるは、金溜る人を運のある、我は運のなき杯と申は愚にして大なる誤
- ・【始末】 金持にならんと思はば、酒宴遊興奢りを禁じ、長寿を心がけ、始末第一に商売に励む
- ・【先祖】 貪欲を思はば、先祖の憐みに外れ、天理に漏れ候べし
- ・【吝き】 始末と吝きの違いあり、吝きは消え失せぬ、始末の光明満ぬれば十万億土を照らすべし、かく心得て行いなせる身には、五万十萬の金の出来るは疑いなし
- ・【祈／陰徳善事】 ただし、運と申す事の候て、国の長者とも呼るる事は一代にては成りがたし。二代三代も続いて善人の生まれ出る也。それを祈り候には、陰徳善事を成さんより全く別儀候はず。
 ※金持ちになれるかどうかは運ではなく努力である。
 ※先祖、天理に対する敬い。心学の導入。
 ※真の金持ちになるためには運が必要。陰徳善事を重ね、祈り続ければ成就できる。
 ➡得た利益を「世間（地域）」に還元することが肝要 ➡「世間よし」

3) 日野商人の陰徳善事

①陰徳善事の実践例

- ・【インフラ整備】 中井正治右衛門家：文化・文政年間の勢多橋の架け替え費用の寄付（3000 両）
- ・【救恤活動】 鎌掛出身で群馬県玉村に出店を出した瀬川喜三郎家の飢饉・火災時における施行
- ・【行政運営】 正野玄三家：明治初年に学区取締・医務取締役として教育・医療体制の整備に活躍

②陰徳善事の作法

- ・物事に関わる者全てが当事者意識を持つことの重要性を認識していた
- ・寄付行為をする際、彼らは全額を拠出せずに、皆が少しずつ負担し合うことを常とした
- ・文化～文政年間の馬見岡綿向神社の境内整備：中井家が呼びかけ、広く町衆に寄付を募る
- ・大正 5 年の日野駅舎の改築：日野商人のほか、東桜谷、鎌掛、南・北比都佐、西大路の村民が寄付分担

4) 日野大当番仲間～もう一つの陰徳善事～

①日野大当番仲間：

- ・業種を問わず地縁で結ばれた商人が集まり、合議制で方針を決め、互いの商いを支え合う組合組織
- ・最盛期には 400 人以上の商人が加盟
 ➡陰徳善事の考えに基づく画期的な制度

②日野商人の生きた「世間」

- ・蒲生氏の旧城下町（村井・大窪・松尾）
- ・大井六郷（西大路・村井・大窪・松尾・河原）
- ・日野札山（日野溪の 20 数箇村）
- ・出店先の地域

※日野商人は 1 人の商人である前に、地域で生きる百姓であり町人

※地域人としての自覚が「陰徳善事」を是とする日野商人の商業理念を生み出す源